

2025 年 3 月 27 日

令和 6（2024）年度第 3 回名城大学 FD 研修会報告
（テーマ）ライティング

（文責）FD 委員 佐久本 功達

令和 6 年度第 3 回名城大学 FD 研修会はテーマを「ライティング」として、10 月 30 日(水)16:30～18:00 に本館 3 階講義室 2 において開催した。当日参加できない教職員には対面研修会終了後にオンデマンドによる録画視聴研修の機会を提供した。

今回の研修会は、FD 委員会とライティングセンターの共同開催として、本学の 1 年次必修科目「アカデミックライティング I」やライティングセンターの活動内容について採り上げ、「本学におけるライティングに関する授業や取り組みの内容、学生のレポートの現状や課題を知ること、各教員がレポートの出題や評価の在り方、ライティング力の向上のための今後の取り組みについて考える機会としたい」ということを目的とした。参加者は、80 人（対面参加 48 人、オンデマンド（録画視聴）研修 32 人）、69.8%の参加率であった。

はじめに、木村堅一 FD 委員長より開会のあいさつがあり、本テーマが入学から卒業まで幅広く関わる重要課題であることが強調された。具体的には入学試験、小論文、必修科目「アカデミックライティング I」、卒論など、多岐にわたる学習活動に関連する点が指摘された。また、本学のライティングセンターは 2016 年度に設立され、来年度で 10 周年を迎え、今年度は特任教授を配置し強化を図ったが、入学生のリライティング力の低下を踏まえ、さらなる改革が求められていることが述べられた。さらに、ライティング力の到達目標や評価基準の設定や生成 AI の活用についても議論が必要であり、教員からの積極的な意見を期待するとの呼びかけがあった。

つぎに、屋良健一郎ライティングセンター長より、「アカデミックライティング I」についてシラバスに基づいた説明があった。「アカデミックライティング I」では 3 回のレポート課題を課すこと（1 回目 800 文字、2 回目 1200 文字、3 回目 1200 文字）、レポート課題は共通のルーブリックにより評価しているとの説明があった。本年度前学期の学生による授業評価アンケートによれば、問 8「総合的に判断してこの授業は満足だった」は 4.27（全クラス平均）と良好であり、教員の説明が丁寧であるとの好意的な学生コメントの紹介があった。一方で、学生から改善して欲しい点として、教員によって採点基準が異なるのではないかとコメントが報告された。これについては、担当教員間でルーブリックの使い方にズレがある可能性について言及があった。今後の課題としては、3 年次でライティング力が低下しレポートが書けなくなっていたり、要約ができていなかったり、インターネットの内容をそのまま引用し参考文献を読まなかったりする学生の事例が報告され、1 年次で培われたライティング力をその後如何に伸ばすか、あるいは維持するかの方法を考える必要があるという問題提起があった。

続いて、久高利美子ライティングセンター副センター長より、「ライティングセンターの活動報告」があった。最初に『公立大学法人名城大学「建学の精神」の手引き』より引用があり、ライティングセンターは、言語学習センター、数理学習センターと共に本学のリベラルアーツ教育を特徴づける学習センターの 1 つとして活動しているとの説明があった。具体的には、『ライティングセンター 2024 年度前学期報

告書』の内容に基づき、例えば、チュータリングの基本的な流れ（導入→展開→まとめ、1人当たり45分間）や学生チューターの「独り立ち検査」についての説明があった。また、昨年度から卒論の文章力についてもチュータリングを行っていることの報告があった。さらに、ライティングセンター利用者から「いいんじゃないと肯定してくれて、頑張れる気がした」や「一緒に考えながらも、主体的に取り組めた」など好意的な感想の紹介があった。最後に、「アカデミックライティングⅠ」の受講生のうち、成績が振るわない学生たちに対してどのようにライティングセンターに足を運んで貰えるように誘導するかという課題提起があった。

本研修会のメインプログラム「グループディスカッション」はライティングセンター運営委員である平上久美子教授と大城真理子上級准教授の司会およびファシリテイトにより進行した。6人程度のグループに分かれ、参加者の問題意識や経験の事例などをそれぞれのグループにて共有し、対話を通して学び合う企画とした。そのため、このプログラムの性質上録画は行わなかった。なお、小テーマは、

小テーマA「レポートの出題」

テーマ設定、文字数、出題方法(紙または電子、Universal Passport、MS Teams)など

小テーマB「レポートの返却・評価」、

添削、返却後の再提出、評価の基準や指標、提出遅延への対応など

小テーマC「レポートのルール」、

レポートに関する約束事や禁止事項、その範囲や周知方法、生成系AIの活用経験など

小テーマD「引用文献・参考文献」、

引用文献や参考文献の紹介方法、許容範囲(例:ブログや動画を文献として扱うか)など

小テーマE「卒業論文の執筆指導」、

卒論指導の工夫(指導困難例への対応を含む)、ルーブリックの活用法など

小テーマF「グラフ、図表」

ビジュアル、図表、地図、アプリの使用、ChatGPTの活用など

の6つとし、さらに、小テーマBについては2グループ、小テーマEについては3グループが作られ、合計9グループとなった。各グループのメンバー構成は5学科およびリベラルアーツ機構の教員による学際的なグループになるよう調整したあと、35分間のディスカッションを行った。これにより、各グループ各テーマに関する問題提起と解決策、経験、事例等が情報共有されると共に活発な議論が展開された。

最後に9つの各グループからそれぞれのグループディスカッションの内容について全体発表を行い、林優子副学長による閉会のあいさつで本研修会が終了した。

研修会終了後のアンケートについては、「研修会内容について、ご自由にお書きください」の質問に対し「グループディスカッションは研修に能動的に参画できるのでとても良いが、時間の確保を十分に必要とする必要がある」と「グループ討論が最も印象的であった。グループ討論の時間が短かったので次は長く設定して欲しい」など、グループディスカッションについては好意的な意見ではあるが、時間が短かったという意見が多数寄せられた。また、「他学部の教員と話し合うことでより深まった」と「他学科の教員との交流ができて、楽しかったです」という意見が複数あり、学際的なグループで実施したディスカッショ

ンがFD研修に効果的であることが示唆された。また、「アカデミックライティングIに関する質問や意見がありましたら記入してください」の質問に対しては、「(前略) 教員の数が少なく、担当買いが頻繁に回ってくるので、負担に感じる」や「専任教員の業務負担軽減の観点から、当該科目の担当教員を非常勤講師等、専任教員以外の教員に担当いただくことを強く希望している」など、当該科目担当教員の負担に関する意見・要望や「やはり課題を出すことは良いですが、評価後のフィードバックが難しいです。大多数に共通する修正点をコメントしますが、学生によっては理解できない学生もいるので、難しいです」など、課題レポート評価後の学生に対するフィードバックについての問題提起が寄せられた。あと、「『AIの使用を認めない』というのは、どのレベルの『使用』なのかをはっきりとした方が良いと思います。(中略) 作成の過程でAIを用いることは、論理性を高めるなどのメリットもあるように思います」などAIの使用に関することについての意見も複数あった。

冒頭の開会のあいさつにもあったように、今回のテーマである「ライティング」は入学から卒業まで幅広く関わる重要課題である。したがって、寄せられたアンケートの回答内容も入学から卒業まで幅広く関わる内容になっている。これ以上アンケートについての詳細にここに記すことは省略するが、本アンケート結果については、今後FD委員会を通して全学に共有されることを希望する。今回のFD研修会の参加者から寄せられたこれらの意見の中に本学の「ライティング」に関する今後のさらなる改革のヒントが含まれていることを大いに期待したい。

研修会当日の様子

